

現代フランス語の中間言語音韻論

—IPFC-japonais プロジェクト—

川口 裕司 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

松澤 水戸 (東京外国語大学大学院博士後期課程)

杉山 香織 (東京外国語大学大学院博士後期課程)

近藤 野里 (東京外国語大学大学院博士後期課程)

ドゥテ シルヴァン (早稲田大学)

要 旨

2008年12月に始まった「現代フランス語の中間言語音韻論 IPFC」の背景と目的を説明し、Global COEの言語情報学班がIPFCプロジェクトに関連してこれまで行ってきた様々な研究の内容を提示し、足かけ五年間にわたる研究の経緯と成果を示した。

1. IPFC プロジェクト

1.1. 背景

現代フランス語の中間言語音韻論 *Interphonologie du français contemporain*¹ (以下、IPFC) のプロジェクトは、2008年に東京外国語大学大学院のGlobal COEプログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」²とフランスの国際プロジェクト「現代フランス語の音韻論 *Phonologie du français contemporain* (以下、PFC)」³との協働によって立ち上げられた国際的な共同研究プロジェクトであり、現在はシルヴァン・ドゥテ Sylvain Detey (早稲田大学、ルーアン大学)、イザベル・ラシーヌ Isabelle Racine (ジュネーヴ大学)、川口裕司 (東京外国語大学) の3名によって運営されている。近藤、川口 (2009:51)⁴によれば、IPFCの構想は、2006年12月9日にパリの *Fondation Maison des Sciences de l'Homme (FMSH)* で開催さ

¹ 中間言語音韻論 *Interphonologie* という用語は、中間言語 *Interlangue* から派生した用語である。中間言語音韻論とは、主に、学習者が第二言語としてある言語を習得する際に、学習の様々な過程・段階における、学習者の音声的・音韻的特徴を理論的に研究する分野である (近藤、川口 2009:53)。

² <http://cbille.tufs.ac.jp/>。詳細は同パンフレットを参照: http://cbille.tufs.ac.jp/assets/files/gcoe_pamphlet_20100316.pdf。

³ PFCは2002年にフランスで始まった国際プロジェクトであり、IPFCの親プロジェクトにあたる。その目的は以下の5つの目的を実現することである (近藤、川口 2009:52)。①話し言葉フランス語がどのように単一性をもち、かつ多様性を有するのか、その正確な姿を提示すること、②共時態と通時態の両方について、音韻論モデルを検証すること、③共通の方法論を用いて、話し言葉フランス語の大きなデータベースを構築すること、④音韻論的な知識を相互に共有しつつ、自然言語処理のためのツール開発を促進すること、⑤フランス語教育とフランス語学のためのデータを拡大し、刷新すること。

⁴ 近藤野里、川口裕司 (2009) 「IPFCと中間言語としての現代フランス語研究」、『ふらんぼー』34, 51-67。

れた Journée PFC において、川口が “Projet de UBLI et la phonologie du français chez les apprenants japonais” と題する中間言語音韻論に関する発表を行い⁵、またドゥテとドミニク・ヌヴォ Dominique Nouveau (ナイメーヘン大学) が、“PFC pour l’enseignement du français” と題する発表を行った時点に遡る。いずれにせよ世界中のフランス語母語話者の音声データを収集するための PFC プロトコル (調査要領) に準拠した形で、様々な国のフランス語を母語としないフランス語学習者の音声データを収集し、データベース化することは、非常に意義のある研究であると言える。

IPFC プロジェクトの目標は、フランス語を母語としないフランス語学習者の音声・音韻体系を研究することである。そのためにフランス語を習得する過程で構築される、あるいは観察されるフランス語学習者の中間言語における音声や音韻を分析する。IPFC プロジェクトは、さらに中間言語音韻論を越えて、外国語としてのフランス語 (Français Langue Étrangère, 以下, FLE) の音声産出と知覚、さらに文法や語法等に関心を持つ研究者にも関わるプロジェクトである。というのも、詰まるところ IPFC が構築するであろうコーパスは、部分的にはあれ、形態論、語彙論、統辞論、語用論といった多面的な言語分析のための言語データとなるからである。

近藤、川口 (2009) は IPFC プロジェクトの主な独創性を挙げている。①PFC のツールを利用して話し言葉フランス語の統語的・語彙的情報を収集しながら、学習者の言語能力、とくに彼らの音声と音韻に焦点を定めた。②諸地域の学習者データを比較対照できるように、調査項目に一貫性を与えた。③既存の PFC データベースを参照することで、単一言語および多言語環境における言語変異を比較研究できる。

1.2. 第二言語の音声学・音韻論研究

第二言語の学習者コーパスに関する研究の多くは、語彙論および形態統辞論に関わるものである。したがって音韻論に関する研究には、ある種の遅れが存在していた。音声学や音韻論の分析では、データが語学ラボラトリーに帰属していたり、話者の数や分析される言語構造や発話の数が極端に少数で限られていた。さらに英語以外の言語においては、文章の読み上げにせよ、会話にせよ、発話を対象とする研究があまりなされて来なかった。Hansen Edwards & Zampini, 2008 および Gut, 2009 参照。

そういうわけで発話能力や教育といった応用言語学的な視点や他の目的で収集された第二言語のコーパスを用いた音声学・音韻論的研究は最近になってようやくなされるようになった。たとえば、第二言語としてのオランダ語(Neri, Cucchiari & Strik, 2006), 第二言語としてのポーランド語(Cylwik, Wagner & Demenko, 2009), 第二言語としてのドイツ語, ヨーロッパにおける第二言語としての英語(Gut, 2009), アジアにおける第二言語としての英語(Visceglia, Tseng, Kondo, Meng & Sagisaka, 2009), さらに、分節音だけでなく超分節音に関する研究(Trouvain & Gut, 2007 ; Meng, Tseng, Kondo, Harrison & Visceglia, 2009)が挙げられる。

⁵ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/art/kawaguchi061209.pdf> を参照。

1.3. フランス語学習者コーパス研究

フランス語研究の分野において、母語話者による話し言葉コーパスの不足により、産出言語に関する研究は散発的にしか行われてこなかった(Blanche-Benveniste 2010:1)。フランス語学習者話し言葉コーパスの構築もまた、十分に行われていない。その結果、フランス語学習者コーパスに基づいた話し言葉の研究もまだまだ限定的である。既存の学習者コーパスの多くは、小規模であるか、公開が限定的であることが多い⁶。しかし、以下に紹介する2つのコーパスは、体系的に構築された大規模なコーパスで、公開も行われている。また、それらのコーパスに基づいた研究も発表されている。

The French Language Learner Oral Corpora (FLLOC)は、サウサンプトン大学の研究チームによって構築され、運営されているコーパスである。このコーパスは、研究目的に限りデジタルサウンドファイルとその転写から成る電子データを自由に使用することが可能である⁷ (Rule 2004: 344, Myles 2005: 386)。データベースには、イギリス人フランス語学習者による話し言葉を収録した1375のサウンドファイルとその転写が含まれ、そこには学習者のレベルに関する情報、使用したタスクの詳細、そして形態統語タグも付加されている(Myles 2005: 386-387)。このコーパスに基づいた研究として、フランス語学習者による否定辞の使用とその位置に関する分析、語彙的発達と形態統語的発達の間に見られる関係の分析、定型的表現と自由表現との関係についての分析などが行われている (Marsden et al. 2002, Rule 2004, David et al. 2009, Rule et al. 2003)。

もうひとつのフランス語中間言語コーパスは、the corpus Lancom (le français comme LANGue et COMMunication)である。これは、1994年からルーベン大学 (K.U.Leuven)の研究チームがフランス語学習者のエラー分析を目的として構築を行っているコーパスである (Debrock et al. 1999: 46-47, Flament-Boistrancourt 2001: 2, Mertens 2002:4)。The corpus Lancomは2001年までに39の録画と、18時間の転写が完了しており、計160593語がインターネットから入手可能である⁸ (Flament-Boistrancourt 2001: 6)。このコーパスは、ベルギーのフラマン語母語話者による中間言語データと母語話者による録画データを含んでおり、参加者はフランス語でロールプレイを行っている。つまり、同じ場面設定について、母語話者と学習者の話し言葉のデータが含まれるパラレルコーパスである(Debrock et al. 1999: 48)。場面設定は、電話での会話、仕事の面接、招待、海外旅行の計画、ホテルの予約など多岐にわたっている (Flament-Boistrancourt 2001: 6)。談話的側面を観察することによって、会話の構造(会話の始め方と終わり方)の分析、助動詞 *devoir* と *falloir* の選択の分析、疑問文型の選択(イントネーション型、*est-ce que* 型、倒置型)の分析、法の選択(直説法か条件法)に関する分析などを行っている(Debrock et al. 1999: 49, Flament-Boistrancourt 2001)。

なお、日本人フランス語学習者コーパスで、体系的に構築されているものは今までに例がない。したがって、IPFCプロジェクトは、学習者コーパスの事例が少ないフランス語を対象として、マルチタスクに基づく音声録音を行い、データをコーパス化して、研究蓄積

⁶ 既存のフランス語学習者コーパスに関する情報は、(Rule 2004)が詳しい。

⁷ <http://www.flloc.soton.ac.uk>

⁸ <http://bach.arts.kuleuven.ac.be/elicop>

の浅い分野である FLE に関する音声学・音韻論的、またその他の中間言語に関する研究を行うプロジェクトであり、その学術的意義は高いと考えられる。

1.3.1. IPFC の目的

IPFC には研究の動機づけが二つある。一つは本質的に中間言語音韻論としての動機づけであり、もう一つはコーパス言語学のそれである。すでに述べたように、中間言語音韻論における巨大なコーパスに基づく研究は、まだまだ始まったばかりであり、世界的に見ても稀である。このことはとりわけフランス語において、この分野で実際に利用できる学習者の音声コーパスが極めて少ないことを物語っている。他方、コーパス言語学の分野では、PFC プロジェクトのおかげで、最近になってその分野での相対的な遅れが解消されつつある。PFC 開始から 10 年を経て、近年ではプロジェクトは教育学的分野あるいは社会言語学的研究へと広がりをもつようになり、2008 年末に IPFC プロジェクトが始動したことによって、フランス語を母語としない人々で多言語使用者や FLE 学習者を含む、より広い言語使用者を対象とする研究課題に正面から取り組むこととなった。

IPFC プロジェクトの目的は、大きく研究的側面と教育的側面に分れる⁹。

研究的側面からみた IPFC プロジェクトの目的は、詰まるところ「PFC プロトコルに基づく(学習者言語の)研究コーパスを構築すること *créer un corpus de recherche, sur la base du protocole PFC*」であると言ってよい。このコーパスは、FLE あるいは第二言語としてのフランス語(Français langue seconde, FLS)の習得を研究する応用言語学者、さらには音声学および音韻論を研究対象とする言語学者、心理言語学者、教育者のために有益である。コーパスには調査対象となったフランス語学習者の集団に特徴的な情報だけでなく、それらの学習者に普遍的に観察される傾向等も含まれる。またコーパスは可能な限り長期的な調査の結果に基づく必要がある。

次に、教育的側面からみた IPFC プロジェクトの目的について述べておく。上記のコーパスは PFC コーパスと統合されることによって、以下のような情報を提供することが可能になる。すなわち、フランス語を第一言語としない話者たちによって話される口語フランス語に関する情報を学習者や教育者に提供できる。これによって学習者は、より多様な言語変異に習熟することができ、教育者たちも専門家育成のためにその情報を活用できる。さらに IPFC コーパスは、フランス語学習者の発音データとしてだけでなく、典型的あるいは起こりうる誤りと特徴的な誤りのような、フランス語習得の過程における困難さに関する情報を学習者と教育者に提供できる。

上記の IPFC プロジェクトの研究目的は、さらに新たな研究につながっていく可能性を秘めている。それは異なる母語のそれぞれに対応したタスクを用いることで、より多様な FLS および FLE を研究するためのコーパスが構築され利用可能になる。そのことから以下の比較研究的視点が生み出される。①コーパス内の各タスク間での比較、②さまざまな母語を持つフランス語学習者間の比較、③さまざまな変異体の話者のあいだでの比較、等である。

⁹ IPFC の最初の指針(2008年3月)に拠る。近藤、川口(2009) p.55を参照。

IPFCは中間言語音韻論や発音教育において提起される多様な要望に応えることができる。母語の異なる学習者はどのようにしてフランス語の音韻体系を学習していくのであろうか。IPFCはこれについて資料を提供できるであろう。FLSやFLEにおける変異体とはどのようなものか、母語は第二言語学習における変異体にどのような影響を与えるのか。IPFCはそうした疑問を考えるための資料を提供することになる。世界中で用いられているフランス語の様々な発音をユビキタス環境で聴取することができれば、どれほど素晴らしいであろうか。フランス語の多様性を知り、さらには多様性を学習するための教材を提案するのはIPFCの任務であろう。最後に、国際言語としてのフランス語の地位と機能を考えるための基礎的データもIPFCが提供することになろう。

2. IPFC プロトコル

IPFCの調査は取得できたデータを様々な研究に利用するため、全ての調査において被験者となる学習者から、調査とデータ利用に関する承諾書を取っている。本論文末にある資料を参照。IPFCプロトコルと方法論は基本的にPFCのそれに準拠しており、以下の六種類のタスクから構成される¹⁰。

1. 特有単語リストの繰り返しタスク
2. PFC単語リストの読み上げタスク
3. 特有単語リストの読み上げタスク
4. PFCテキストの読み上げタスク
5. インタビュータスク
6. 自由会話タスク

IPFCプロトコルは、網羅的かつ漸進的に難易度が高くなるようにアンケート項目が設計されている。まず最初に、単語繰り返しと単語読み上げタスクがあり、次に文章読み上げ、次にフランス語母語話者もしくは同等レベルのフランス語話者とのインタビュータスクが課され、最後に学習者同士での自然会話タスクとなる。以下にタスクの内容と進め方について説明する。

¹⁰ IPFCの枠組みは2008年3月の最初の指針から随時改訂されている。ここでの内容は2010年7月の指針に基づいている。

2.1. アンケートと録音環境の確認

被験者となる学習者は以下のようなアンケートから回答をはじめます。図 1 を参照。このアンケートは、筆記式のアンケートの場合と同様¹¹、学習者本人の母語やフランス語の学習歴にとどまらず、その両親の出身地や使用言語等も質問項目となっており、かなり全般的な社会言語学的アンケートと言える。質問によって、文字入力、ラジオボタン選択、プルダウン式メニュー選択で回答する。

1. NOM Prénom(s) :

2. Langue maternelle1 :

3. Langue maternelle2 :

4. Autre langue utilisée à la maison :

5. Sexe : homme femme

6. Année de naissance :

7. Par semaine, vous étudiez le français :

8. Depuis combien de mois étudiez-vous le français :

9. Vos études de français :

MOIS/ANNEE- MOIS/ANNEE	PAYS- INSTITUTION	VOLUME HORAIRE HEBDOMADAIRE
04/2007 - 02/2009	Japon - Waseda high School	1,7 heures
04/2009-02/2010	Japon - Waseda University	3 heures
02/2010-02/2010	Japon - Institut Franco- Japonais	6 heures

図 1 : アンケート画面

次に、学習者の使用するコンピュータで録音環境が整っているかを確認するためのページに移る。図 2 を参照。IPFC の録音調査では Moodle のシステムの外に録音環境を構築しているが、録音された音声ファイルは Moodle のデータベースに対応するようになっており、これによって音声ファイルと Moodle の学習者データは同一の ID によって管理される。

¹¹ Moodle を用いない調査法では紙ベースのアンケートを行う。アンケートは付録として p.66 に提示した。

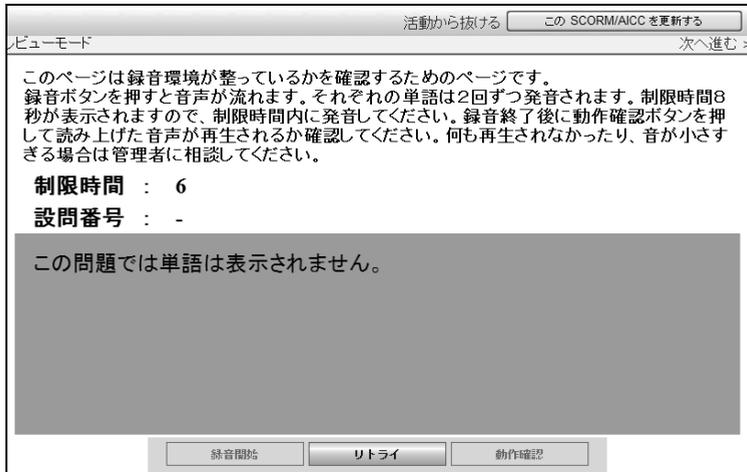


図 2：録音環境確認画面

2.2. 特有単語リストの繰り返しタスク

最初のタスクは「特有単語リストの繰り返し」である。図 3 を参照。このタスクでは、まず被験者となる学習者が画面下の録音開始ボタンを押す。するとヘッドフォンを通して単語の音声が入りこえてくる。被験者は聞こえた単語を制限時間 8 秒間の間に繰り返しで発音するのである。

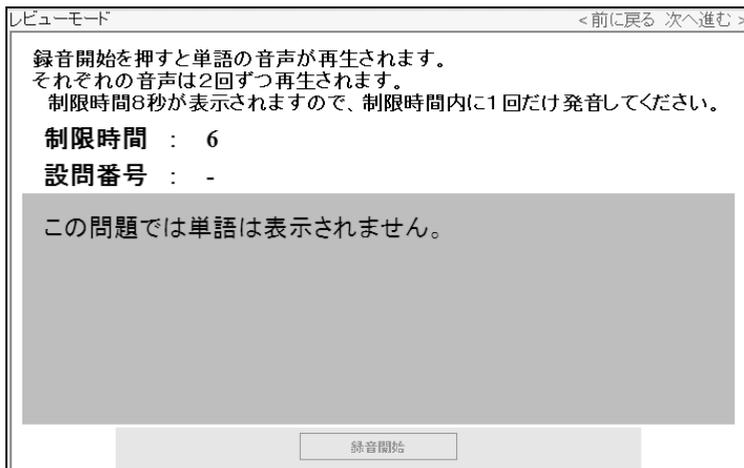


図 3：特有単語リストの繰り返し

特有単語リストとは、調査対象となっている学習者に特有の発音特徴を分析するために用意された単語リストのことであり、IPFC-japonais の場合には、日本語を第一言語とする学習者の発音特徴を調べるための単語リストとなる。

現行の単語リストが日本語母語話者のあらゆる音声変異に対応可能なリストになっているかどうかは必ずしも明確ではない。とはいえ日本語を第一言語とするフランス語学習者に見られる発音特徴については、既に先行研究のある程度の蓄積があり、その一般的な傾向は、たとえば Lauret (2007) pp.75-77 等に簡潔にまとめられている。ここでは現行の特有単語リストと関連づけて主な調査項目となる音声特徴を見ておく。

	語頭	語中 (母音間)	語末
b/v	base/vase	la base/la vase	l'arabe/la rave
f/φ	foule/houle	la foule/ la houle	
s/ʃ	sic/chic		assis/hachis
ti	tic		bâti
u/y	ou/eu	bouille/bulle	bout/bu
u/ø,œ	ou/eux	moule/meule	mou/meut
ẽ/ã		teinte/tante	teint/tant
ã /õ	anse/once	panse/ponce	pan/pont
gl/gr	glas/gras	le glas/le gras	aigle/aigre
子音連続	expliqué/exprimé		

周知のように b/v の対立は日本人が不得意とする子音対立である。F あるいは H で綴られるフランス語では、日本語の[φ]あるいは[h]が聞かれる可能性がある。また母音[i]の前では、s/ʃ の対立がうまく機能せずに、[ji]に近い発音になることが多い。同じく[i]の前で t-は破擦音[tʃ]になる。母音対立の u/y では、日本人学習者は/u/をしばしば[w]または[ə]として実現することが知られており、/y/音は渡り音を前に伴って[jw]と発音する傾向がある。u/ø,œ の場合、日本人学習者は/œ/と/ø/をいずれも[w]と発音することがある。鼻母音の弁別は ẽ/ã と õ/ã を調査する。日本人学習者が最も苦手とする区別である l/r の対立は、阻害音+流音の連続 gl-/gr-の文脈で調査される。日本人学習者は子音連続の間に母音を挿入して発音する傾向がある。このためリスト中に子音連続[kspl/kspr] を含む幾つかの単語が含まれている。

以上の音声特徴以外にも、日本語を母語とする学習者は、狭い/e/の母音を広い母音/ɛ/として発音する傾向があり、/o/と/ɔ/の母音対立を実現できないことが多い。また摩擦音の/s/が破擦音[dʒ]になることもよく知られている。これまで分析者の直観に頼って行われることの多かった日本語を母語とするフランス語学習者の発音特徴の分析は、IPFC 調査によって、より詳細に研究されることになろう。こうした音声特徴を調査するための特有単語リストは 62 個の単語から成る。

1	vase	17	parade	33	l'arabe	49	bout
2	aigle	18	panse	34	Inde	50	glas
3	tic	19	ou	35	houle	51	boule
4	teinte	20	once	36	le glas	52	bu
5	sic	21	moule	37	hors	53	base
6	rat	22	les pas	38	la foule	54	balle
7	pou	23	pan	39	heure	55	eu
8	port	24	peu	40	hachis	56	expliqué
9	teint	25	le gras	41	gras	57	assis
10	ponce	26	la vase	42	foule	58	ballade
11	tant	27	meule	43	exprimé	59	anse
12	peur	28	la rave	44	eux	60	Andes
13	pont	29	la houle	45	bâti	61	bar
14	tante	30	le pas	46	chic	62	aigre
15	peau	31	la base	47	bulle		
16	meut	32	là	48	eau		

日本語母語話者の特有単語リスト

被験者が発音した音声ファイルは、WAVE フォーマットの 20Kbps, 11.025Hz, 16 ビット, モノラル形式でサーバーに送信される¹²。サーバーは音声ファイルをタスクと学習者情報とともに自動的にデータベース化する。

2.3. 二つの単語リストの読み上げタスク

IPFC プロトコルには PFC プロトコルと共通のタスクがあり、PFC の単語リストやテキストをそのまま利用している。これによって学習者言語とフランス語母語話者の言語を比較対照できるようになっている。読み上げタスクは二つある。最初に PFC の単語リストを読み上げ、次に、さきほど繰り返したタスクを行った特有単語リストを読み上げる。

¹² 2011 年度からはサーバーの負荷を考慮し、MP3 形式で送信するように改良された。

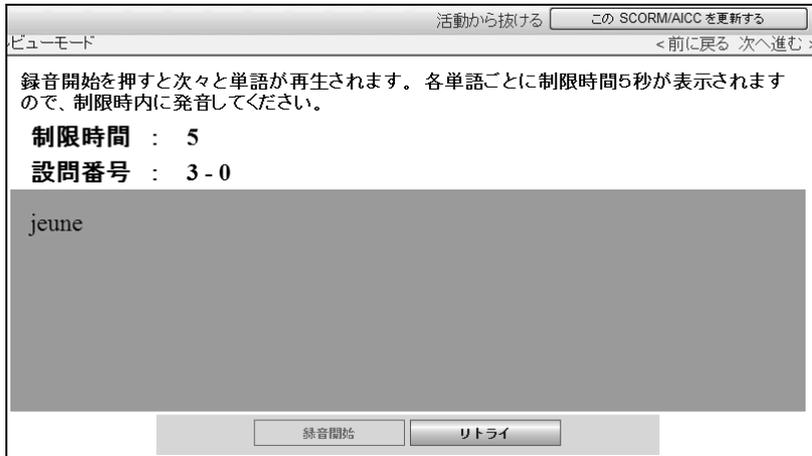


図 4 : PFC 単語リストの読み上げ

被験者は画面下にある録音開始ボタンを押す。すると画面に読み上げるべき単語が 5 秒間表示される。被験者はその制限時間の中に単語を読み上げる。PFC の単語リストは特有単語リストよりも大きく、94 個の単語から成る。

1	roc	33	liège	64	slip
2	rat	34	baignoire	65	compagne
3	jeune	35	pêcheur	66	peuple
4	mal	36	socialisme	67	rauque
5	ras	37	relier	68	cinquième
6	fou à lier	38	aspect	69	nier
7	des jeunets	39	niais	70	extraordinaire
8	intact	40	épais	71	meurtre
9	nous prendrions	41	des genêts	72	vous prendriez
10	fêtard	42	blond	73	botté
11	nièce	43	creux	74	patte
12	pâte	44	reliure	75	étriller
13	piquet	45	piqué	76	faites
14	épée	46	malle	77	feutre
15	compagnie	47	gnôle	78	quatrième
16	fête	48	bouleverser	79	muette
17	islamique	49	million	80	piquais
18	agneau	50	explosion	81	trouer
19	pêcheur	51	influence	82	piquer
20	médecin	52	mâle	83	creuse

21	paume	53	ex-mari	84	beauté
22	infect	54	pomme	85	patte
23	dégeler	55	étrier	86	pâte
24	bêtement	56	chemise	87	épais
25	épier	57	brin	88	épée
26	millionnaire	58	lierre	89	jeune
27	brun	59	blanc	90	jeûne
28	scier	60	petit	91	beauté
29	fêter	61	jeûne	92	botté
30	mouette	62	rhinocéros	93	brun
31	déjeuner	63	miette	94	brin
32	ex-femme				

PFC 単語リスト

被験者は引き続いて、同じ要領で特有単語リストの読み上げタスクを行う。音声の録音が可能に行われると、音声をその場で再生することができる。テストが終われば、特有単語リストの繰り返し、PFC 単語リストの読み上げ、特有単語リストの読み上げ、この三種類のタスクの収録音声は、各単語ごとにデータ化されてサーバーに保存される。もしも被験者が特有単語リストの繰り返しタスクにおいて、五番目の単語で録音をやりなおした場合、この単語については二つのデータが生成され、サーバーに保存される。このように単語単位でデータ化することにより、一つの音声データサイズを小さくできるだけだけでなく、データのいわゆる頭出しが不要になる。研究者は、たとえば、特有単語リストの繰り返しタスクの十番目の単語について、すべての学習者のデータを一括してダウンロードすることができる。

2.4. PFC テキストの読み上げタスク

PFC のテキスト読み上げタスクについては、九つの読み上げタスクに分割して被験者に提示した。長いテキストの読み上げであり、一回の録音データサイズをなるべく小さくして、サーバーへの負荷を減らし、データ送信をスムーズに行う必要があったからである。

読み上げタスク 01

まず最初に下の日本語の説明を読み、読み終えたら録音ボタンを押して、表示されるフランス語の文章を読み上げてください。

首相はお決まりの遊説ルートを変えて、フランスの「奥田舎」を発見しようと思った。そして Beaulieu というほとんど知られていない小さな村を通ることに決めた。そのニュースで村のなかは大騒ぎになる。

Le Premier Ministre ira-t-il à Beaulieu?

« Le village de Beaulieu est en grand émoi. Le Premier Ministre a en effet décidé de faire étape

dans cette commune au cours de sa tournée de la région en fin d'année.

読み上げタスク 02

録音ボタンを押して、下記の文章を読み上げてください。

Jusqu'ici les seuls titres de gloire de Beaulieu étaient son vin blanc sec, ses chemises en soie, un champion local de course à pied (Louis Garret), quatrième aux jeux olympiques de Berlin en 1936, et plus récemment, son usine de pâtes italiennes.

読み上げタスク 03

録音ボタンを押して、下記の文章を読み上げてください。

Qu'est-ce qui a donc valu à Beaulieu ce grand honneur ? Le hasard, tout bêtement, car le Premier Ministre, lassé des circuits habituels qui tournaient toujours autour des mêmes villes, veut découvrir ce qu'il appelle "la campagne profonde".

読み上げタスク 04

最初に日本語の説明を読み、読み終えたら録音ボタンを押して、下記の文章を読み上げてください。

市長はとても心配であった。首相の人気は急落しており、デモがおきたり、政敵たちが首相の訪問や警備体制を拒絶するのではないかと考えた。

Le maire de Beaulieu - Marc Blanc est en revanche très inquiet. La cote du Premier Ministre ne cesse de baisser depuis les élections. Comment, en plus, éviter les manifestations qui ont eu tendance à se multiplier lors des visites officielles ?

読み上げタスク 05

録音ボタンを押して、下記の文章を読み上げてください。

La côte escarpée du Mont Saint-Pierre qui mène au village connaît des barrages chaque fois que les opposants de tous les bords manifestent leur colère. D'un autre côté, à chaque voyage du Premier Ministre, le gouvernement prend contact avec la préfecture la plus proche et s'assure que tout est fait pour le protéger.

読み上げタスク 06

録音ボタンを押して、下記の文章を読み上げてください。

Or, un gros détachement de police, comme on en a vu à Jonquières, et des vérifications d'identité risquent de provoquer une explosion. Un jeune membre de l'opposition aurait déclaré: "Dans le coin, on est jaloux de notre liberté. S'il faut montrer patte blanche pour circuler, nous ne répondons pas de la réaction des gens du pays.

読み上げタスク 07

録音ボタンを押して、下記の文章を読み上げてください。

Nous avons le soutien du village entier." De plus, quelques articles parus dans La Dépêche du Centre, L'Express, Ouest Liberté et Le Nouvel Observateur indiqueraient que des activistes des communes voisines préparent une journée chaude au Premier Ministre. Quelques fanatiques auraient même entamé un jeûne prolongé dans l'église de Saint Martinville.

読み上げタスク 08

まず最初に日本語の説明を読み、読み終えたら録音ボタンを押して、下記の文章を読み上げてください。

仕方なく市長は首相に手紙を書くことに決めた。この訪問がたとえ必要なことであっても、Beaulieu のことは公表しないで、そっとしておいてくださいと言う内容であった。

Le sympathique maire de Beaulieu ne sait plus à quel saint se vouer. Il a le sentiment de se trouver dans une impasse stupide. Il s'est, en désespoir de cause, décidé à écrire au Premier Ministre pour vérifier si son village était vraiment une étape nécessaire dans la tournée prévue.

読み上げタスク 09

録音ボタンを押して、下記の文章を読み上げてください。

Beaulieu préfère être inconnue et tranquille plutôt que de se trouver au centre d'une bataille politique dont, par la télévision, seraient témoins des millions d'électeurs. »

第一のタスクでは内容の要約が日本語で提示される。各文章は母語話者が自然な速度で読めば 10 秒もかからない程度の長さであるが、このデータを海外の大学から東京外国語大学にあるサーバーへ送信するにはそれなりの時間がかかり、試験的運用では 20 秒近く待つことがあった。そのような場合、操作説明書では次のタスクへ移らず、送信終了を示す指示文が画面に表示されるまで待つようにと明記してあった。ところが世界各地の大学でのテストにおいて、この画面指示が出る前に次のタスクへ移ることが原因でデータ送信が中断されるという重大な事故が頻発したため、プログラムを改良し、データ送信中は「しばらくお待ちください。」というメッセージを出すようにした。テキスト読み上げタスクを終えると、被験者は Moodle からログアウトすることになる。研究者は Moodle 上で学習者データの有無を確認できる。Moodle 上では、一人の学習者のデータを一つずつダウンロードすることができるが、これでは効率が悪いいため、別途、データダウンロード専用のページを作成した。図 5 を参照。このページでは任意のデータ単位で全ての学習者データをダウンロードすることができるだけでなく、任意に選んだ学習者単位ですべてのデータをダウンロードすることもできる。

narrow down sco		narrow down examinee						
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	22	FI1006	1006	2009.7.10	Premiere annee du departement de francais		
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	23	FI11106	1106	2009.7.23	Deuxieme annee du departement de francais		
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	24	FA1406	1406	2009.7.9	etudiants de FLE, niveau grand debutant		
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	25	5356 III-IV	5356	2009.7.3	3eme et 4eme annee		
24 5356 III-IV Enquete sur les etudiants de 3eme, 4eme annee et de maitrise								
<input type="checkbox"/>	sco ID	sco name	wav	Size	Date	mp3	Size	Date
<input type="checkbox"/>	95	IPFC 日本1		197 MByte	May 19 2011 03:22:31 PM		80 MByte	October 8 2010 04:03:17 PM
<input type="checkbox"/>	96	IPFC 全体		224 MByte	May 19 2011 03:24:02 PM		82 MByte	October 8 2010 04:03:40 PM
<input type="checkbox"/>	97	IPFC 日本2		118 MByte	May 19 2011 03:24:52 PM		47 MByte	October 8 2010 04:03:54 PM
<input type="checkbox"/>	98	PFCJ 読み01		13 MByte	September 14 2010 06:03:18 PM		5 MByte	September 15 2010 08:50:47 AM
<input type="checkbox"/>	99	PFCJ 読み02		20 MByte	September 14 2010 06:03:29 PM		6 MByte	September 15 2010 08:50:50 AM
<input type="checkbox"/>	100	PFCJ 読み03		17 MByte	September 14 2010 05:04:44 PM		5 MByte	September 14 2010 06:03:31 PM
<input type="checkbox"/>	101	PFCJ 読み04		14 MByte	September 14 2010 05:04:51 PM		4 MByte	September 14 2010 06:03:33 PM
<input type="checkbox"/>	102	PFCJ 読み05		23 MByte	September 14 2010 05:05:02 PM		7 MByte	September 14 2010 06:03:36 PM
<input type="checkbox"/>	103	PFCJ 読み06		25 MByte	September 14 2010 05:05:14 PM		8 MByte	September 14 2010 06:03:38 PM
<input type="checkbox"/>	104	PFCJ 読み07		26 MByte	September 14 2010 05:05:25 PM		8 MByte	September 14 2010 06:03:41 PM
<input type="checkbox"/>	105	PFCJ 読み08		18 MByte	September 14 2010 05:05:33 PM		6 MByte	September 14 2010 06:03:44 PM
<input type="checkbox"/>	106	PFCJ 読み09		13 MByte	September 14 2010 05:05:40 PM		4 MByte	September 14 2010 06:03:47 PM
<input type="checkbox"/>	128	PFCJ 読み10		182 MByte	May 19 2011 03:21:00 PM		68 MByte	September 15 2010 08:46:42 AM

図 5：録音データダウンロード専用ページ

Moodle を用いた IPFC 調査はここで終るが、IPFC プロトコルではさらにインタビュータスクと自由会話タスクが残されている。2008 年に東京外国語大学で IPFC 調査が始まった時、被験者になったのはフランス語を専門とする学部 1 年・2 年生およびフランス語を専門としない学部生たちであった。このためフランス語のレベルからしても、インタビューと自由会話のタスクを課すことは難しいと判断した。

2.5. インタビュータスク

2011 年 8 月現在、インタビュータスクは 12 名の学部および大学院生を対象に、2010 年 6 月 4 日・10 日に行われただけである。インタビュータスク（別名、ガイド付き会話 Conversation guidée）では、フランス語を母語とするか同等の言語能力を有する教師が、学習者に対して個別にインタビューを行う。インタビュー時間は約 15 分であり、教師は質問番号を最初に述べてから質問を行う。質問はあらかじめ決められており、単一回答を求める質問と説明を求める質問に分れる。

単一の回答を求める質問には、1. あなたは何歳で国籍は何ですか？ 2. 何語を話しますか？ 3. フランス語を学び始めたのはいつですか？ 4. フランス語を学び始めたのはどこですか？ 5. フランス語を学び始めたのはなぜですか？ 等がある。

説明を求める質問とは以下のような質問である。6. あなたの家から近くの駅まで行く道を説明してください。 7. 今までに海外旅行をしたことがありますか。あるとすれば、その旅行について話してください。 8. まだなければ、どの国を旅行したいですか、それはなぜですか？ 9. 将来の職業や計画は何ですか？ 10. フランス語では何が難しいです

か？ 何ができませんか？ 11. フランス語を学ぶ一番いい方法は何ですか？ 12. 話される地域によってフランス語に違いがあることに気づいていましたか？ 13. 一番いいフランス語を話すのはどこだと思いますか？ 14. あなたが話したいと思うフランス語はどんなフランス語ですか？

2.6. 自由会話タスク

IPFC-japonais では、これまで自由会話の録音を 2010 年 5・6 月と 2011 年 6・7 月に行った。2011 年 8 月現在、データ収集に参加したフランス語学習者は、大学 3・4 年生および大学院博士前期・後期課程の学生計 50 名である。具体的には、2010 年度は大学院生 7 名、学部生 21 名、2011 年度は学部生 22 名であった。フランス語学習歴は 3 年から 10 年以上までと幅広い。またフランス語圏への留学経験も全くない者から、3 年以上の者もいる。自由会話の録音をより円滑に行うため、学習者には以下のような指示文を提示した¹³。タスク指示文の日本語訳は以下の通りである。

*グループ内で二人のペアを作ります。できるだけ全員が 2 回話するようにペアを作ってください。

↓

*録音にはできるだけ静かなところを選んでください。雑音が多いと PRAAT で分析できません。

↓

*ペアのそれぞれが話すテーマを以下の中から選びます。

1. 観た映画
2. 読んだ本
3. 訪れた場所 (国, 町, 美術館, など)
4. 日本のこと (料理, 習慣, 生活様式, 祭)
5. 日本と他の国の文化的な違い
6. 大切な思い出 (子供の頃, 家族, 学校, 旅行, エピソード, 最初のフランス語の授業)
7. 現在の話題
8. 新聞などの三面記事

↓

*もし二人が同じテーマになった時は、どちらかが別のテーマを選びます。

↓

*できるだけ会話は活発にやってください。ただし、会話が途切れそうになったときだけは、日本語を使って構いません。

↓ (IC レコーダの電源を入れる)

*最初に、選んだテーマについて相手の人と 5 分程度話します。

↓

*今度は、もう一方が選んだテーマについて約 5 分間話してください。やり方は前と同じです。

(IC レコーダの電源を切る)

¹³ 指示文はドゥテが草案を作成した。

録音された音声データは大学院生と専門家が転写作業を行った。転写作業には音声分析ソフト PRAAT¹⁴を使用し、図 6 のように音声と転写の対応が取られた。

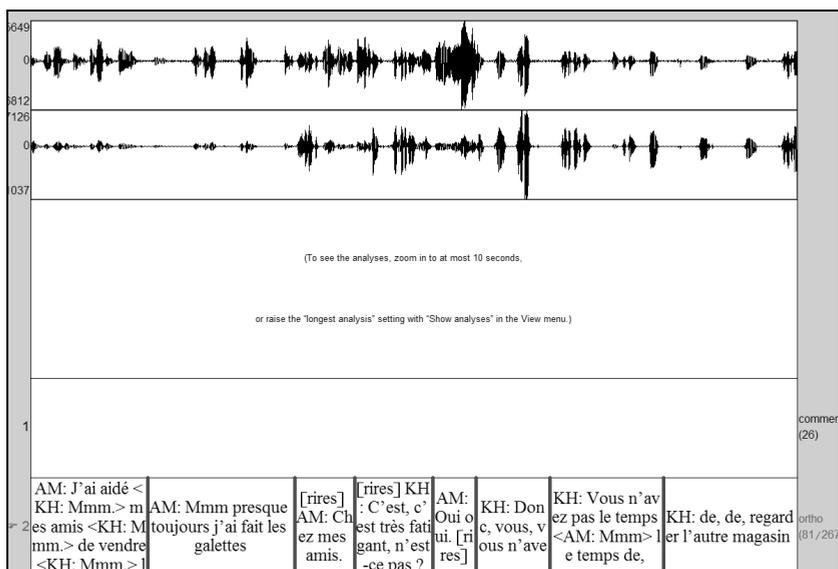


図 6：自由会話の録音と転写

3. IPFC-japonais の研究活動

先にも述べたように IPFC-japonais が始まったのは 2008 年 12 月である。ここでは IPFC-japonais が始まる以前の時期と、始まってから IPFC の公式サイトが構築されるまでの時期、さらに今日までの進捗状況という風に、IPFC プロジェクトの歴史を経年的な三つの時期に区分して、それぞれについて説明する。

3.1. IPFC-japonais が始動するまで

東京外国語大学大学院では 2002 年に 21 世紀 COE 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」¹⁵ (2002 年度-2006 年度)が採択されて以降、Web 上の教材開発とともに、Web 技術を利用した言語教育研究の可能性を模索してきた。2007 年 6 月 8 日に台湾淡江大学で開催されたシンポジウム「e 化学習—多言語 e-Learning 教育の現状」において、川口は「コンピュ

¹⁴ アムステルダム大学の Paul Boersma と David Weenink が開発したフリー音声分析ソフトで <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>よりダウンロード可能。

¹⁵ <http://www.coelang.tufs.ac.jp/>. 詳細は同パンフレットを参照: http://www.coelang.tufs.ac.jp/common/pdf/project_overview_200510.pdf

一タ技術に基づく言語学と言語教育学の連携の可能性—21 世紀 COE の試み—¹⁶ と題する発表を行い、言語研究の今後の新たな方向性として、ユビキタスな学習環境としての e-Learning の充実を挙げた。同シンポジウムにおいて林俊成は、21 世紀 COE が開発した Web 上の日本語会話教材のアクセスログの解析と学習者ポートフォリオ収集に関する報告を行った¹⁷。2007 年 7 月 5 日には、東京外国語大学において「フランス語教育の現状」という研究会が開催され、ドゥテは日本におけるフランス語教育の現状と PFC コーパスの発音教育への応用可能性について報告した。同 7 月 19 日に学内の研究会で、林と杉山香織は「ネットワークを利用した学習者コーパス 学習者ポートフォリオ収集プログラム説明」の報告を行った。TUFS e-Learning システムを利用して学習する学生の学習過程における作文や発話音声を集めてデータベースする試みであり、画像をみて作文・書き取り等を行い、教師は学習者の進捗状況を確認できる。図 7 を参照。杉山の「日本人フランス語初級学習者スピーキングコーパスの構築」¹⁸ は TUFS e-Learning システムを用いた研究である。同年 4 月から 7 月にかけてデータ収集を行い、26 名の回答を得た。タスクはいずれもヨーロッパ共通参照枠の A1 レベルに基づいた教材から選び、モノログ形式とインタビュー形式の二種類のタスクを課し、モノログ形式では日本語の指示文を読んでフランス語で答え、インタビュー形式ではフランス語の指示文を聞いてフランス語で回答させた。杉山がこの学習者言語データとフランス語母語話者データを比較検討したところ、両者の間で使用頻度の差がとくに際立っていたのは、フィルターに分類される発話要素と中性代名詞であった。フィルターはスピーキングに顕著な要素であるが、当該の初級学習者はフィルターの使用を習得していなかった。また中性代名詞は定型表現の一部としては習得しているものの、単独で使用するには至っていないことがわかった¹⁹。

ところで TUFS e-Learning システムは現在でも学内で利用されており、様々な言語教育研究に活用されているが、システムの仕様およびデータ更新などに問題があったため、IPFC はこのシステムを採用せずに、他のシステムを模索することにした。

¹⁶ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/070608-02.pdf>. この研究は文部科学省科学研究費補助金（基盤 A）「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」（2007 年度-2010 年度 代表者 川口裕司）の研究補助を受けた。

¹⁷ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/070608-03.pdf>.

¹⁸ 杉山香織 (2010) 「日本人フランス語初級学習者スピーキングコーパスの構築」、『ふらんぼー』第 35 号, 19-33.

¹⁹ 杉山香織 (2010) 「フランス語学習者スピーキングコーパスの構築とその分析—フィルターと中性代名詞を中心に—」、『コーパスに基づく言語学教育研究拠点研究報告集 4』, 313-327.

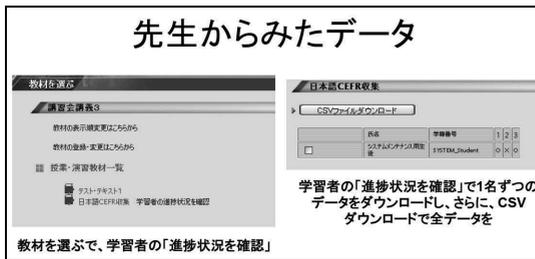
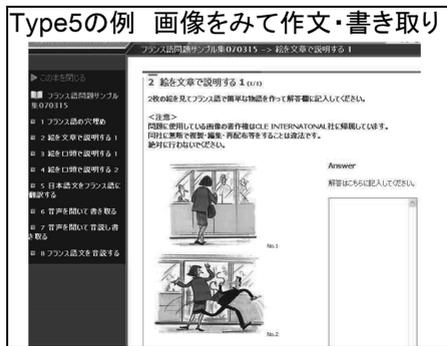


図 7 : TUFUS e-Learning システムを用いた学習者コーパスの構築

その間、東京外国語大学大学院では 2007 年秋に Global COE「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」²⁰ (2007 年度-2011 年度)が採択された。Global COE の言語情報学班では、川口によって Moodle を用いた e-Learning の基礎研究がスタートした。Moodle はオープンソースの e-Learning システムであり、様々な国々の教育機関や高等研究機関で広く利用されており、比較的信頼性が高く、データ収集や更新などが容易で、機動性に優れた e-Learning システムである。松澤水戸は Moodle を利用してフランス語のディクテーション・タスクに見られる中級フランス語学習者の誤答分析を行い、2007 年 11 月 18 日に開催された外国語教育学会の第 11 回大会で研究報告を行った²¹。図 8 を参照。



図 8 : Moodle を用いたフランス語ディクテーション・タスク

²⁰ 註 2 を参照。

²¹ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/071118.pdf>. 松澤水戸 (2008) 「フランス語ディクテーション・タスクにみられる中級フランス語学習者の音的誤答の分析」、『外国語教育研究』第 11 号, 43-57.

Moodle の利用が可能になったことから IPFC でも Moodle の利用を検討することになった。2008 年 3 月 12 日にドゥテは「現代フランス語の中間言語音韻論 最初の指針 *Interphonologie du français contemporain (IPFC) Premier document d'orientation*」を起草し²², IPFC には言語学的な研究目的 Objectifs 1) Scientifiques と教育的目的 Objectifs 2) Pédagogiques の両方があることを明記し, 成果物として①学習者言語コーパス, ②発音を教育するための Web ページ, ③研究著作, ④プロジェクト著作の四つを掲げた。この時点での IPFC 調査地域は東京外国語大学 (日本) とジュネーヴ大学 (スイス) の二カ所であった。

その後, Global COE の言語情報学班と技術者の協力により, Moodle を用いたマルチメディアコーパス収集が実現し, Global COE が 6 月 3 日に行った 2008 年度第 1 回研究会において研究報告が行われた。最初に川口は「Moodle を利用したフランス語教育の実践例」²³ を紹介し, 次に松澤は「Moodle による書き取りタスクの実践とコーパス構築」²⁴ について説明し, 最後に林が「Moodle による音声録音方法のデモンストレーション」を報告した。これらの基礎研究を通して IPFC プロジェクトへの Moodle 導入を実現するための準備が整えられた。同年 8 月, Moodle 上で実施可能な, 反復タスクと朗読タスクの日本版が開発され, 2008 年 10 月に東京外国語大学において, 川口, ドゥテ, 近藤のチームによって, Moodle を利用した日本人フランス語学習者の音声データ収集が試験的に実施された。

3.2. IPFC-japonais

2008 年 12 月 11 日にパリの Fondation Maison des Sciences de l'Homme (以下, FMSH) で開催された Journée IPFC 2008-Paris において, ドゥテと川口が「*Interphonologie du Français Contemporain (IPFC)*」²⁵ の研究報告を行い, ここに IPFC-japonais プロジェクトが始まった。この研究発表は, 「データの自動収集と日本人学習者 *Récolte automatisée des données et apprenants japonais*」の副題が付けられており, Moodle を用いた学習者音声の自動収集について解説し, 上記の試験的に行った録音データを聴かせ, 海外の研究者たちに本プロジェクトへの参加を呼びかけた。

Moodle を用いて音声収集を行うことの利点は, ①複数の情報提供者から同時に音声データを取得できる, ②画一的な録音環境を確保できる, ③ネットワークを通してアンケートとその結果にアクセスが可能である, ④パソコン画面にしたがって各自のペースで録音を進めることができる, ⑤音声データの均質性(20Kbps, 11.025Hz, 16 ビット, モノラル形式の WAVE ファイル)が担保される, ⑥音声データと被験者情報を関連づけてデータベース化できる, などである。図 9 を参照。

²² <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/080312.pdf>.

²³ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/080603-01.pdf>.

²⁴ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/080603-02.pdf>.

²⁵ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/081211.pdf>.

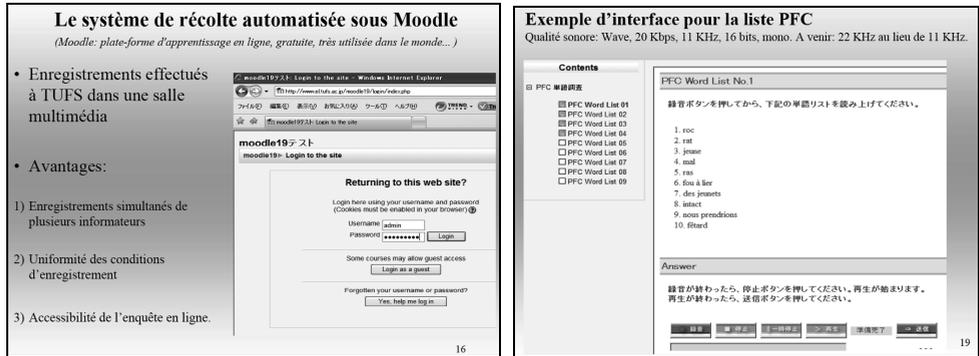


図 9 : Moodle による学習者音声の自動収集

この段階では調査項目の中に、無意味語 *logatomes* を用いた朗読タスクがあった。このタスクによって、様々な音環境における学習者の発音を観察できるのだが、想定した調査項目を実施するだけで、ほぼ 1 時間程度を要することがわかり、無意味語のタスクは放棄せざるを得なくなった。

ラシーヌを中心とするチームは、Moodle こそ利用しなかったが、IPFC プロトコルに基づきジュネーヴ大学でフランス語を学習しているスペイン語母語話者のデータ収集を行った。2009 年 6 月には IPFC プロトコルの調整と IPFC-espagnol が開始され、2009 年 6 月 5 日、トゥール大学で開催された第 24 回 CerLiCO 国際会議で、ラシーヌのチームが、“*Transcription de corpus d'apprenants multilingues de FLE et analyse interphonologique: enjeux méthodologique*”²⁶ の研究報告を行い、今後、IPFC のプロジェクトが進められる中で大きな問題となるであろう、学習者コーパスの記述における困難点、たとえばスペイン語母語話者の母音間の子音 /b/ の狭擦音化等が紹介された。学習者コーパスの質を上げるためには、こうした場合の記述コードを一元化しておきたいところだが、最良の記述方法を提示することはしばしば困難である。同年 9 月 4 日にヌシャテル大学で開催された AFLS 2009 で、同チームは “*Le projet «Interphonologie du français contemporain»: réflexions méthodologiques et premières données d'apprenants hispanophones et japonophones*”²⁷ と題する発表の中で、同 7 月に、ほぼ時を同じくして東京外国語大学とジュネーヴ大学で行った IPFC 調査の結果を報告した。日本語母語話者は鼻母音を、スペイン語母語話者は b/v の対立を中心に議論した。

日本では 2009 年 11 月 15 日に開催された外国語教育学会の第 13 回大会で、近藤が「Moodle を利用したフランス語学習者音声コーパスと学習者におけるリエゾンの分析」²⁸ と題する発表を行った。義務的リエゾンコンテキストでは、名詞句、前置詞句等のリエゾンは学習

²⁶ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/090605.pdf>. Racine, I., Zay, F., Detey, S. & Kawaguchi, Y. (2011), “*Transcription de corpus d'apprenants multilingues de FLE et analyse interphonologique: enjeux méthodologiques*”, In *Travaux Linguistiques du CerLiCO 24*, Rennes: PUR, 13-30.

²⁷ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/090904.pdf>. Racine, I., Detey, S., Zay, F. & Y. Kawaguchi (à paraître). “*Des atouts d'un corpus multilatéraux pour l'étude de la phonologie en L2: l'exemple du projet « Interphonologie du français contemporain » (IPFC)*” In A. Kamber et C. Skupiens (éds). *Recherches récentes en FLE*. Berne: Peter Lang.

²⁸ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/091115-01.pdf>. 近藤野里 (2010) 「学習者におけるリエゾン習得 Moodle を利用したフランス語学習者音声コーパスを用いて」, 『外国語教育研究』第 13 号, 78-90.

年数に比例してリエゾンの比率が高くなる。これに対し、一部の代名詞では学習歴に関わらず、学習者が苦手とするリエゾンコンテキストのあることがわかった。さらに禁止的リエゾンについては、学習年数とリエゾン比率に反比例の関係があることを指摘した。

同年12月12日にFMSHでのJournée IPFC2009-Parisでは、ドゥテを中心とするチームが、“Les voyelles nasales du français en L2: le cas des japonophones et des hispanophones dans le cadre d’IPFC”²⁹ の報告を行った。同報告は、その後さらに議論を重ねて、2010年7月の世界フランス語学会議 Congrès Mondial de Linguistique Française – CMLF 2010 での研究発表 S. Detey, I. Racine, Y. Kawaguchi, F. Zay et N. Buehler, “Evaluation des voyelles nasales en français L2 en production: de la nécessité d’un corpus multitâches” に結実した³⁰。

結論にかえて —IPFCの発展—

2010年の夏が終わる頃、これまでドゥテと川口の間で懸案となっていた IPFC のサイトによろやく一つの答えがみつかった。Moodle を利用した調査は、今後日本とスイス以外でも始まる可能性がある、ところがパリ第10大学のサーバー上に現在の Moodle と録音システムを移植して運営することはリスクを伴う。そこで IPFC-japonais のプロジェクトが当初から Global COE 言語情報班の研究計画として位置づけられていたこともあり³¹、IPFC のサイトは東京外国語大学大学院の Global COE サーバー上に構築されることに決まり、実際の運用は2010年10月15日に始まった。図10を参照。

²⁹ <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/kakenA2011/091212.pdf>.

³⁰ http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/art/2010_CMLF2010.pdf.

³¹ <http://cblle.tufs.ac.jp/index.php?id=6> にある「フランス語学習者コーパス」を指す。

IPFC

Interphonologie du Français Contemporain (IPFC)

IPFC

- Actualité
- Cadre IPFC
- Participants
- Descriptif
- Corpus
- Références
- Projets IPFC
 - IPFC-allemand
 - IPFC-anglais canadien
 - IPFC-espagnol
 - IPFC-grec chypriote
 - IPFC-italien
 - IPFC-japonais
 - IPFC-néerlandais
 - IPFC-norvégien
- Colloques
 - IPFC2011-Paris
 - IPFC2011-Tokyo
 - IPFC2010
- Sites partenaires

Bienvenue sur le site du projet IPFC (Interphonologie du français contemporain), piloté par:

- Sylvain Detez (Université Waseda & Université de Rouen)
- Isabelle Racine (Université de Genève)
- Yuji Kawaguchi (Tokyo University of Foreign Studies)

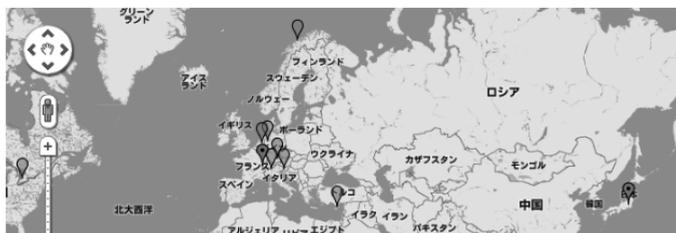
Ce projet est dédié à l'étude des systèmes phonético-phonologiques des locuteurs non-natifs du français, pour lesquels le français est une langue étrangère (FLE) ou seconde (FLS). Il s'agit donc de populations d'apprenants qui peuvent faire usage du français dans diverses situations et appartiennent de ce fait au monde francophone.

Par interphonologie, on désigne généralement le nouveau système (phonético-)phonologique des apprenants d'une langue étrangère en cours de construction ou dans un état stabilisé.

Par-delà l'interphonologie, le projet IPFC concerne tous ceux qui s'intéressent à la production (et la perception) orale en français langue étrangère, puisque, à terme, le corpus IPFC devrait pouvoir être, au moins en partie, exploité pour des analyses multi-niveaux (morphologie, lexicale, syntaxe, pragmatique).

- Pour une vision globale des objectifs et des enjeux du projet, consulter la section Cadre IPFC.
- Pour une vision plus précise de chacun des sous-projets de IPFC, consulter la section Projets IPFC.

Carte des enquêtes



What's New

- 2011.07.27 Participants
- 2011.07.27 IPFC-néerlandais
- 2011.07.15 Actualité
- 2011.07.15 Références
- 2011.07.06 IPFC-anglais canadien

図 10 : IPFC サイト <http://cblle.tufs.ac.jp/ipfc/>

ACCUEIL
PFC RECHERCHE
base de données en ligne
PFC ENSEIGNEMENT
le français expliqué
PFC PRÉSENTATION
le français oral dans le monde
IPFC
PFC PUBLICATIONS
bulletins, colloques, logiciels

Année de naissance	Études de français (en mois)	Séjours en pays francophone (en mois)	Sexe	Recherche
<input type="text" value="1989"/>	<input type="text" value="0-20"/>	<input type="text" value="0"/>	<input type="text" value="F"/>	

	Année de naissance	Lieu de naissance	Sexe	Nationalité	Langue maternelle	Spécialité française (en mois)	Études de français (en mois)	Séjours en pays francophone (en mois)	Séjours en pays étrangers non-francophone (en année)
<input type="checkbox"/>	1989	Tokyo	F	japonaise	japonais	français	18	0	3
<input type="checkbox"/>	1989	Fukuoka	F	japonaise	japonais	français	18	0	2

LECTURE LISTE GÉNÉRIQUE	RÉPÉTITION LISTE SPÉCIFIQUE	LECTURE LISTE SPÉCIFIQUE
<input type="text" value="compagnie"/> <input type="text" value="médecin"/> <input type="text" value="baignoire"/>	<input type="text" value="peur"/> <input type="text" value="moule"/> <input type="text" value="la vase"/>	<input type="text" value="peur"/> <input type="text" value="moule"/> <input type="text" value="la vase"/>

LECTURE TEXTE

<input type="checkbox"/>	3	150	1989	Tokyo	F	japonaise	japonais	français	18	APEF Jun2	0	0
<input type="checkbox"/>	4	158	1989	Kumamoto	F	japonaise	japonais	français	16.8		0	0
<input type="checkbox"/>	5	149	1989	Ibaraki	F	japonaise	japonais	français	18		0	0

図 11 : IPFC コーパスのサンプルページ <http://cblle.tufs.ac.jp/ipfc/ipfcsearch/>

- 56 -

IPFC サイトの開設と同時に、日本人学習者のコーパスのサンプルページ <http://cblle.tufs.ac.jp/ipfc/ipfcsearch/> も構築された。図 11 を参照。このコーパスデータは、学習者の生年、学習期間、フランス語圏滞在歴、性別などの学習者特徴を条件にして検索できるようになっている。2011 年末の段階では日本人学習者のデータしか聞くことができないが、すでに収集済みの IPFC-espagnol のデータが 2012 年に追加される予定である。

2010 年 7 月になるとジュネーヴ大学でラシーヌらのチームが Moodle を利用してスペイン語母語話者の調査を行うことを決定した。そのためフランス語による Moodle 利用の手引が必要となった。同 8 月以降、ラシーヌは松澤と協力しながら利用の手引（学習者用と教師用）に着手し、年末に完成した³²。図 12 参照。

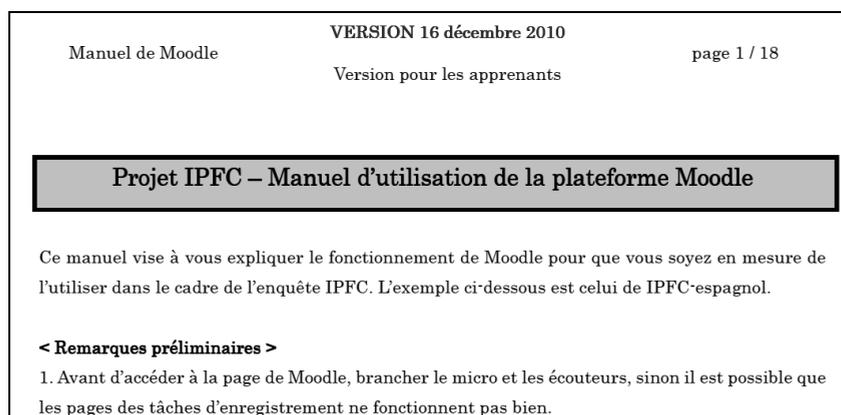


図 12 : Moodle 利用の手引（学習者用）

2010 年の秋からは、Moodle の調査により収集された音声データをタスクごとに、あるいはデータ提供者ごとにまとめてダウンロードできる専用ページを開発することになった。

この年に IPFC の音声データを利用した実験音声学的研究が行われ、2010 年 11 月 14 日に開催された外国語教育学会の第 14 回研究報告大会において、丸島直己と川口が「日本人学習者によるフランス語中高母音の発音の習得—o,ø,u を中心に—」³³ という題で研究報告を行った。IPFC コーパスから抽出した女性学習者 10 名について、二つのミニマルペア *peu/peau* と *meule/moule* を音響分析したところ、とくに /u/ の発音において日本語の /u/ の影響が強く、学習歴が進んでも改善されない傾向があるのに対して、/o/ と /ø/ の弁別は学習年数とともに獲得される傾向にあることがわかった。フランス語母語話者 1 名に実施した知覚テストでも、/u/ が最も認定の難しい母音であったことから、上記の傾向は知覚テストによっても裏付けられた。同じ学会で、杉山は「フランス語学習者と母語話者の話し言葉に

³² 学習者用は http://cblle.tufs.ac.jp/ipfc/assets/files/Moodle%20IPFC%20-%20Manuel_Apprenant_16dec.pdf, 教師用は http://cblle.tufs.ac.jp/ipfc/assets/files/Moodle%20IPFC-%20Manuel_Enseignant_16dec.pdf から入手できる。

³³ 丸島直己、川口裕司 (2011) 「日本人学習者によるフランス語中高母音の発音の習得—/o/, /ø/, /u/ を中心に—」, 『外国語教育研究』 第 14 号, 39-56.

における使用語彙の難易度の違い」³⁴ の報告を行った。杉山は VocabProfil³⁵ というプログラムを利用して、フランス語母語話者とフランス語学習者の使用語彙をレベル別に分類し、母語話者と学習者の話し言葉における使用語彙の難易度の量的分析を行った。杉山がフランス語学習者のデータとして用いたのは、IPFC プロトコルの学習者同志があるテーマについて自由に会話するタスクの録音データである。杉山の研究は IPFC の学習者言語コーパスが音声・音韻研究を行うためのデータとなるだけでなく、語彙レベルの研究にも重要な試料となることを示している。杉山はこの研究の中で、VocabProfil を用いて初級フランス語学習者とフランス語母語話者の語彙的多様性の違いを分析した。結果として、それぞれの頻度層の語彙に多様性の違いが観察されたが、とくに VocabProfil で off-list words として分類される語彙の中に、躊躇い表現や曖昧表現が質的な差として含まれることがわかった。

IPFC サイトの開設と Moodle の利用手引を作成したことで、IPFC を国際プロジェクトへと発展させるための下準備はほぼ完成したと言える。そのことを周知すべく、同年 12 月 6 日に FMSH で開催された Journée IPFC2010-Paris で、松澤と川口は“Les supports informatiques de IPFC: plateforme Moodle et site IPFC”の報告を行った。2011 年 3 月 15 日には、東京外国語大学で IPFC2011-Tokyo の国際会議を開催するはずであった。ところが、3 月 11 日に起きた東日本大震災とその未曾有の被害によって、会議の開催は中止された。ただし出席予定者たちの好意により、15 日の会議で報告する予定であった内容を HP 上に掲載できたことは幸いであった³⁶。

Journée IPFC2010-Paris とそれに続く Journée IPFC2011-Tokyo による啓蒙活動の甲斐あって、以後、IPFC は飛躍的な発展を遂げて今日に至っている。2011 年 5 月には、ミラノ・カトリック大学のエンリカ・ガラッツィ Enrica Galazzi を中心とするイタリアチームが、IPFC-italien を組織した。同 6 月には IPFC-italien からの依頼で、アンケート項目、各タスクの画面上の説明文等をイタリア語に翻訳し始めたが、Moodle は世界中で使用されることを前提に開発されたため、画面表示の言語は簡単に変更可能になっている。他方、アンケートを含む全てのタスクは、Moodle 上に SCORM 形式のデータを導入するようになっているため、アンケートやタスクの説明文やボタンは翻訳の必要がある。同 7 月には、音声データのアップロードに関して、よりデータ保存の安全性を増した改良版を開発した。この段階でさらにミュンヘン大学のエリッサ・プストカ Elissa Pustka とオスナブリュック大学のトルーデル・マイゼンブルク Trudel Meisenburg を中心とするドイツチーム、トロムス大学のモナ・マルクッセン Mona Markussen とヘレーネ・アンドレアッセン Helene N. Andreassen を中心とするノルウェーチーム、西オンタリオ大学のジェフ・テナント Jeff Tennant のカナ

³⁴ 杉山香織 (2011) 「フランス語初級学習者の話し言葉における使用語彙の複雑さ—母語話者との比較から—」, 『外国語教育研究』 第 14 号, 24-38. 同論考の英語による発展版も出版予定である。Sugiyama K. (2012) “Lexical Profile of French Learner Speech: The Case of Japanese University Students”, In Tono, Y. et al. (eds.) *Developmental and Crosslinguistic Perspectives in Learner Corpus Research*, Series: Tokyo University of Foreign Studies Studies in Linguistics (TUFSL) 4, Amsterdam/ Philadelphia, John Benjamins, pp.279-307.

³⁵ 5000 万語の新聞記事に基づき、語彙が出現頻度によって K1(上位 1000 語)から K3 (2001 位から 3000 位) とリスト外の四つの層に分類し、当該テキストに出てくる語彙の頻度情報を自動的に解析するプログラム。<http://www.lextutor.ca/vp/fit/>を参照。

³⁶ <http://cblle.tufs.ac.jp/ipfc/index.php?id=25>.

ダチーム、ポワティエ大学のフレデリコス・ヴァレトプロス Freiderikos Valetopoulos によるキプロス・ギリシアチーム、さらにナイメーヘン大学のヌヴォによるオランダチームが加わった。IPFC プロジェクトは八カ国に及ぶ国際プロジェクトへと成長したのである。

参考文献

- 石川慎一郎 (2008) 『英語コーパスと言語教育—データとしてのテキスト—』 大修館書店。
- 近藤野里 (2010) 「学習者におけるリエゾン習得 Moodle を利用したフランス語学習者音声コーパスを用いて」, 『外国語教育研究』 第 13 号, 78-90.
- 近藤野里, 川口裕司 (2009) 「IPFC と中間言語としての現代フランス語研究」, 『ふらんぼー』 34, 51-67.
- 杉山香織 (2008) 「書評：応用言語学における話言葉コーパス Spoken Corpora in Applied Linguistics, Campoy, M.C. and Luzón, M.J., eds. Bern: Peter Lang, 2007, 264p.」, 『外国語教育研究』 第 11 号, 169-172.
- 杉山香織 (2010) 「日本人フランス語初級学習者スピーキングコーパスの構築」, 『ふらんぼー』 第 35 号, 19-33.
- 杉山香織 (2010) 「フランス語学習者スピーキングコーパスの構築とその分析—フィラーと中性代名詞を中心に—」, 『コーパスに基づく言語学教育研究拠点研究報告集 4』, 313-327.
- 杉山香織 (2011) 「フランス語初級学習者の話し言葉における使用語彙の複雑さ—母語話者との比較から—」, 『外国語教育研究』 第 14 号, 24-38.
- 杉山香織, 川口裕司 (2007) 「日本人フランス語学習者の単音弁別能力と発音能力—発音教材開発に向けた基礎調査—」, 『ふらんぼー』 32・33 号, 135-152.
- 松澤水戸 (2008) 「フランス語ディクテーション・タスクにみられる中級フランス語学習者の音的誤答の分析」, 『外国語教育研究』 第 11 号, 43-57.
- 丸島直己, 川口裕司 (2011) 「日本人学習者によるフランス語中高母音の発音の習得—/o/, /ø/, /u/を中心に—」, 『外国語教育研究』 第 14 号, 39-56.

Blanche-Benveniste, C. (avec la collaboration de Philippe Martin pour l'étude de la prosodie) (2010). *Le français. Usages de la langue parlée*. Leuven/Paris : Peeters.

Bohn, O.-S. & Munro, M. J. (eds) (2007). *Language Experience in Second Language Speech Learning. In honor of James Emil Flege*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Bulté, B., A. Housen, M. Pierrard and S. van Daele. (2008). Investigating Lexical Proficiency Development over Time – The case of Dutch-speaking Learners of French in Brussels. *French Language Studies*, 18: 277-298.

Cobb, T. and M. Horst. (2004). Is There Room for an Academic Word List in French?. In Bogaards, P. and B. Laufer. (eds.) *Vocabulary in a Second Language: selection, acquisition, and testing*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 15-38.

Cylwik, N., Wagner, A. & Demenko, G. (2009). The EURONOUNCE corpus of non-native Polish for ASR-based Pronunciation Tutoring System. *Proceedings of SlaTE 2009 – 2009 ISCA*

- Workshop on Speech and Language Technology in Education*. Birmingham, UK.
- Daller, H., R. van Hout and J. Treffers-Daller. (2003). Lexical Richness in the Spontaneous Speech of Bilinguals. *Applied Linguistics*, 24(2): 197-222.
- Daller, J., J. Milton and J. Treffers-Daller (eds.). (2007). *Modeling and Assessing Vocabulary Knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press.
- David, A. 2008. "A Developmental Perspective on Productive Lexical Knowledge in L2 Oral Interlanguage." *French Language Studies*, 18: 315-331.
- David, A., F. Myles, V. Rogers and S. Rule. (2009). Lexical Development in Instructed L2 Learners of French: Is There a Relationship with Morphosyntactic Development?. In Richards. B., H. M. Daller, D. Malvern, P. Meara, J. Milton and J. Treffers-Daller (eds.) *Vocabulary Studies in First and Second Language Acquisition: the interface between theory and application*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 147-163.
- Debrock, M., D. Flament-Boistrancourt and R. Gevaert. (1999). Le Manque de "Naturel" des Interactions Verbales du Non-francophone en Français. Analyse de Quelques Aspects à partir du Corpus LANCOM. *Faits de langues* 13: 46-56.
- Delais-Roussarie, E. & Yoo, H.-Y. (2010). The COREIL corpus : a learner corpus designed for studying phrasal phonology and intonation. In Deziubalska-Kolaczyk, K., Wrembel, M. & Kul, M. (eds), *Proceedings of New Sounds 2010 - Sixth International Symposium on the Acquisition of Second Language Speech*. Poznan: Adam Mickiewicz University. 100-105.
- Detey, S., Durand, J. & Nespoulous, J.-L. (2005). Interphonologie et représentations orthographiques. Le cas des catégories /b/ et /v/ chez des apprenants japonais de Français Langue Etrangère. *Revue PArôle* 34/35/36 (supplément): 139-186.
- Detey, S. & Nespoulous, J.-L. (2008). Can orthography influence second language syllabic segmentation? Japanese epenthetic vowels and French consonantal clusters. *Lingua* 118(1): 66-81.
- Detey, S., Racine, I., Kawaguchi Y. (2010). Assessing non-native speakers' production of French nasal vowels : a multitask-corpus-based study. In Minegishi, M., Hieda, O, Hayatsu, E. & Kawaguchi, Y. (éds.). *Working Papers in Corpus-based Linguistics and Language Education 5*, "フイー ルド調査, 言語コーパス, 言語情報学II", Tokyo : Tokyo University of Foreign Studies, 277-293.
- Detey, S., Racine, I., Kawaguchi, Y., Zay, F., Bühler, N., Schwab, S. (2010). Evaluation des voyelles nasales en français L2 en production : de la nécessité d'un corpus multitâches. In Neveu, F., Muni-Toké V., Durand, J., Klingler, T., Mondada, L. et Prévost S. (éds.). *Actes de CMLF'10*, « Phonétique, phonologie et interfaces », Paris: ILF, 1289-1301.
- Eckman, F. R. (2004). From phonemic differences to constraint rankings: research on second language phonology. *Studies in Second Language Acquisition* 26(4): 513-549.
- Escudero, P. (2005). *Linguistic Perception and Second Language Acquisition. Explaining the attainment of optimal phonological categorization*. Doctoral Dissertation, Utrecht University,

LOT Dissertation Series 113.

- Escudero, P. & Boersma, P. (2004). Bridging the gap between L2 speech perception research and phonological theory. *Studies in Second Language Acquisition* 26(4): 551-585.
- Flament-Boistrancourt. (2001). Pragmatique et Approche Communicative: la Contribution du Corpus Lancom. In S. Bouquet (ed.) *Le Français dans le Monde, recherches et applications*. Numéro spécial, 143-170.
- Goodfellow, R., M. N. Lamy and G. Jones. (2002). Assessing Learners' Writing Using Lexical Frequency. *ReCALL*, 14(1): 133-145.
- Granger, S. (1998). Prefabricated Patterns in Advanced EFL Writing: Collocations and Formulae. dans Cowie. A. P. (ed.) *Phraseology – Theory, Analysis, and Applications*. Oxford: Oxford University Press, 145-160.
- Granger, S. (2002). A Bird's-Eye View of Learner Corpus Research. In Granger, S., Hung, J. et Petch-Tyson, S. (eds.) *Computer Learner Corpora, Second Language Acquisition and Foreign Language Teaching*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 3-33.
- Granger, S. (2003). Error-tagged Learner Corpora and CALL: A Promising Synergy. *CALICO Journal*, 20 (3): 465-480.
- Granger, S. (2004). Computer Learner Corpus Research: Current Status and Future Prospects. In Connor, U. and T. Upton (eds.) *Applied Corpus Linguistics: a Multidimensional Perspective*. Amsterdam: Rodopi, 123-145.
- Gut, U. (2009). *Non-native Speech: a Corpus-based Analysis of Phonological and Phonetic Properties of L2 English and German*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Hansen Edwards, J. & Zampini, M. L. (eds) (2008). *Phonology and Second Language Acquisition*. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins.
- Laufer, B. and P. Nation. (1995). Vocabulary Size and Use: Lexical richness in L2 written production. *Applied Linguistics*, 16(3): 307-322.
- Lauret, B. (2007). *Enseigner la prononciation du français: questions et outils*. Paris : Hachette.
- Luzón, M. J., M. C. Compy, M. D. M. Sánchez and P. Salazar. (2007). Spoken Corpora: New perspectives in oral language and teaching. In M. C. Copoy and M. J. Luzón (eds.) *Spoken Corpora in Applied Linguistics*. Bern: Peter Lang, 1-30.
- Malvern, D., B. Richards., P. Meara and J. Milton. (2008). Introduction: Special Issue on Knowledge and Use of the Lexicon in French as a Second Language. *French Language Studies*, 18: 269-276.
- Malvern, D. and B. Richards. (2009). A New Method of Measuring Rare Word Diversity: The Example of L2 learners of French. In Richard, B., H. Daller., D. Malvern., P. Meara., J. Milton and J. Treffers-Daller (eds.) *Vocabulary Studies in First and Second Language Acquisition – The Interface between Theory and Application*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 164-178.
- Marsden, E. F. Myles, S. Rule and R. Mitchell. (2002). Oral French Interlanguage Corpora: tools for data management and analysis. *Centre for Language in Education Occasional Papers*, 58. University of Southampton.

- Marushima, N., Detey, S., Kawaguchi, Y. (2010) Caractéristiques phonétiques des voyelles orales arrondies du français chez des apprenants japonophones. *Flambeau* 36, Tokyo: Université des Langues Étrangères de Tokyo, 53-72.
- McEnery, T., R. Xiao and Y. Tono. (2006). *Corpus-Based Language Studies – An Advanced Resource Book*. Routledge.
- Meng, H., Tseng, C.-Y., Kondo, M., Harrison, A. & Viscelgia, T. (2009). Studying L2 Suprasegmental Features in Asian Englishes: a Position Paper. *Proceedings of Interspeech2009*, Brighton, R-U.
- Mertens, P. (2002). Les Corpus de Français Parlé Elicop : consultation et exploitation. In Binon, J., D, Piet, E, Jan, M. Piet and S. Lies (eds.) *Tableaux Vivants. Opstellen over Taal-en-onderwijs Aangeboden aan Mark Debrock*. Universitaire Pers.
- Milton, J. (2009). *Measuring Second Language Vocabulary Acquisition*. Bristol: Multilingual Matters.
- Myles, F. (2005). Interlanguage Corpora and Second Language Acquisition Research. *Second Language Research* 21, 4: 373-391.
- Neri, A., Cucchiari, C. & Strik, H. (2006). Selecting segmental errors in non-native Dutch for optimal pronunciation training. *IRAL - International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 44: 357-404.
- Ovtcharov, V., T. Cobb and R. Halter. (2006). La Richesse Lexicale des Productions Orales: Mesure Fiable du Niveau de Compétence Langagière. *The Canadian Modern Language Review*, 63(1): 107-125.
- Pillot-Loiseau, C., Amelot, A. & Fredet, F. (2010). Contributions of experimental phonetics to the didactics of the pronunciation of the French as a Foreign language: stage 1: reflection around the establishment of a speaking materials. In Deziubalska-Kolaczyk, K., Wrembel, M. & Kul, M. (eds), *Proceedings of New Sounds 2010 - Sixth International Symposium on the Acquisition of Second Language Speech*. Poznan: Adam Mickiewicz University, 343-348.
- Racine, I., Detey, S., Bühler, N., Schwab, S., Zay, F., Kawaguchi, Y. (2010). The production of French nasal vowels by advanced Japanese and Spanish learners of French : a corpus-based evaluation study. In Dziubalska-Kolaczyk, K, Wrembel, M. & Kul, M. (eds.), *Proceedings of New Sounds 2010 - Sixth International Symposium on the Acquisition of Second Language Speech*, Poznan: Adam Mickiewicz University, 2010, 367-372.
- Racine, I., Zay, F., Detey, S. & Kawaguchi, Y. (2011), Transcription de corpus d'apprenants multilingues de FLE et analyse interphonologique : enjeux méthodologiques. 24ème colloque du CERLICO « Transcrire, écrire, formaliser », Université de Tours, juin 2010. In *Travaux Linguistiques du CerLiCO* 24, Rennes: PUR, 13-30.
- Racine, I., Detey, S., Zay, F. & Y. Kawaguchi (à paraître). Des atouts d'un corpus multitâches pour l'étude de la phonologie en L2 : l'exemple du projet « Interphonologie du français contemporain » (IPFC). Dans A. Kamber et C. Skupiens (éds), *Recherches récentes en FLE*. Berne: Peter Lang.

- Read, J. (2000). *Assessing Vocabulary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Read, J. (2005) Applying Lexical Statistics to the IELTS Speaking Test. *Research Notes*, 20: 12-15.
- Reppen, R. 2010. *Using Corpora in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Richard, B., H. Daller., D. Malvern., P. Meara, J. Milton and J. Treffers-Daller (eds.). (2009). *Vocabulary Studies in First and Second Language Acquisition - The interface between theory and application*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Rule, S., E. Marsden, F. Myles and R. Mitchell. (2003). Constructing a Database of French Interlanguage Oral Corpora. In, Archer, D., P. Rayson, A. Wilson, and T. McEnergy (eds.) *Proceedings of the Corpus Linguistics 2003 Conference. Corpus Linguistics 2003 Conference, UCREL Technical Paper*, 16. University of Lancaster, 669-677.
- Rule, S. (2004). French Interlanguage Oral Corpora: recent developments. *French Language Studies* 14: 343-356.
- Schmitt, N. (2010). *Researching Vocabulary – A vocabulary research manual*. Palgrave Macmillan.
- Sinclair, J. (1996) *Preliminary recommendations on Corpus Typology*. Technical report, EAGLES.
- Simon, E. & Van Herreweghe, M. (eds.) (2010). The relation between orthography and phonology, Special issue, *Language and Speech* 53(3).
- Sugiyama K. (2012) Lexical Profile of French Learner Speech: The Case of Japanese University Students. In Tono, Y. et al. (eds.) *Developmental and Crosslinguistic Perspectives in Learner Corpus Research*, Series: Tokyo University of Foreign Studies Studies in Linguistics (TUFS SL) 4, Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins, pp.279-307.
- Thomas, A. (2008). La Mesure des Progrès Lexicaux en FL2 Avancé. In J. Durand, B. Habert and B. Laks (eds.) *Congrès Mondial de Linguistique Française – CMLF08*. Institut de Linguistique Française, 587-597.
- Tidball, F. and J. Treffers-Daller. (2007). Exploring Measures of Vocabulary Richness in Semi-Spontaneous French Speech – A quest for the Holy Grail? In Daller, J., J. Milton and J. Treffers-Daller (eds.) *Modelling and Assessing Vocabulary Knowledge*. Cambridge University Press, 133-149.
- Tidball, F. and J. Treffers-Daller. (2008). Analysing Lexical Richness in French Learner Language: what frequency lists and teacher judgments can tell us about basic and advanced words. *French Language Studies* 18: 299-313.
- Treffers-Daller, J. (2009). Language Dominance and Lexical Diversity: How bilinguals and L2 learners differ in their knowledge and use of French lexical and functional items. In Richard, B., H. Daller., D. Malvern., P. Meara, J. Milton and J. Treffers-Daller (eds.) *Vocabulary Studies in First and Second Language Acquisition – The Interface between Theory and Application*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 74-90.
- Treffers-Daller, J. (2011). Operationalizing and Measuring Language Dominance. *International Journal of Bilingualism*, 1-17.

- Trouvain, J. & Gut, U. (eds) (2007). *Non-Native Prosody. Phonetic Description and Teaching Practice*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- van Hout, R. and Vermeer, A. (2007). Comparing Measures of Lexical Richness. In Daller, J., J. Milton and J. Treffers-Daller (eds.) *Modelling and Assessing Vocabulary Knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press, 93-114.
- Visceglia, T., Tseng, C.-Y., Kondo, M., Meng, H. & Sagisaka, Y. (2009). Phonetic Aspects of Content Design in AESOP (Asian English Speech cOrpus Project). *Proceedings of Oriental-COCOSDA*, Urumuqi, China.
- Verlinde, S. and Selva, T. (2001). Corpus-Based Versus Intuition-Based Lexicography: Defining a word list for a French learner's dictionary. In P. Rayson, A., T. Wilson., A. McEnery and S. Khoja (dir.) *Proceedings of the Corpus Linguistics 2001 conference*. Technical Papers 13, 594-598.
- Vermeer, A. (2004). The Relation between Lexical Richness and Vocabulary Size in Dutch L1 and L2 Children. In P. Bogaards and B. Laufer. *Vocabulary in a Second Language*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins, 173-188.

承諾書

この調査では、東京外国語大学のグローバル COE における「現代フランス語の中間言語音韻論(IPFC)」プロジェクトへの協力をお願いしております。このプロジェクトはフランス語が使用されている世界中の様々な国で録音調査を実施しています。

これから行う録音は、特に音韻論と言語教育に重点を置いた研究を目的として行われます。その他の目的でデータを利用することはありません。個々の録音と研究成果は専門雑誌、教材等で公開されますが、個人を特定できるような情報、プライバシーを侵害するようなデータを公開したり、利用することは絶対にありません。

以上のことをふまえ、一人でも多くの方に、このプロジェクトへの参加に賛同し同意していただけるようお願いいたします。

東京外国語大学総合国際学研究院

年度に「現代フランス語の中間言語音韻論(IPFC)」プロジェクトの録音調査およびアンケートが、学術的研究を目的として利用されることを承諾します。

年 月 日

氏名

アンケート用紙

ふりがな

名前				
生年・月	年	月		
国籍				
母国語				
出生地				
東京外国語大学での学年				
専攻 (ex:言語学, 社会学, 国際関係学)				
CECR でのレベル	記入不要			
フランス語は何番目に勉強する外国語ですか				
フランス語の学習年数 (中学高校, 大学, 留学先での年数をできるだけ詳細に書いてください。)				
フランス語資格(仏検, DALF, DELF などの資格を持っているのならば明記してください。)				
住居地の推移	国/地域	都市名	年数	順番
				1 番目
				2 番目
				3 番目

現在の居住地（例：東京都世田谷区）								
フランス語の学習を始めた年齢								
フランス語学習を始めたのはどの教育機関でしたか？（高校、大学、フランス留学中、または日仏学院、アテネフランセのような私立語学学校など。）								
外国語学習年数	外国語名	小学校/教室	中学校	高校	大学	専門学校	海外	
	第1外国語(何年学習しているか)							
	第2外国語(何年学習しているか)							
	第3外国語(何年学習しているか)							
フランス人 (native) が担当しているフランス語授業単位数 (年間)								
日本人教師が担当しているフランス語授業単位数 (年間)								
フランス人 (native) が担当しているフランス語授業時間数 (週)								
日本人教師が担当しているフランス語授業時間数 (週)								
家庭ではどの言語を話していますか？								

家族構成を教えてください。(父母, 兄弟姉妹 (何人))			
フランス語圏滞在期間について(旅行, 滞在, 留学など)	国名	期間 (ex.2005年-2006年に11ヶ月)	滞在理由, 滞在中の立場
フランス語圏以外の滞在期間について(旅行, 滞在, 留学など)	国名	期間 (ex.2005年-2006年に11ヶ月)	滞在理由, 滞在中の立場
あなたのフランス語学習の状況は学校(高校, 大学), または個人(家族, 友達, テレビ, ラジオ)のどちらの要因が強いですか? (複数回答可)			
あなたはフランス語を勉強するにあたって, 大学での授業の予復習以外に何かやっていますか?			

あなた自身は oral と écrit のどちらをより重視していますか？									
oral と écrit はあなたのフランス語能力において均等に習得できていると思いますか？									
父	年齢	出身地	職業	最終学歴	母語	使用可能な方言	標準語話せるかどうか	使用可能な外国語	
母	年齢	出身地	職業	最終学歴	母語	使用可能な方言	標準語が話せるかどうか	使用可能な外国語	
文化活動、スポーツ、趣味、旅行、クラブ活動など、自由にお書きください。									